

FGO
ケイオスタイド合同

英霊汚染



成人向
18才未満の閲覧・購読禁止



FGO
ケイオスタイド合同

英霊 汚染

成人向

18才未満の閲覧・購読禁止

目次

p.3	ニトクリス(る〜く)
p.4	静謐のハサン&クロ(小川小)
p.5~6	ブーディカ(ふとし)
p.7	ジャガーマン(幾枝風児)
p.8	ステンノ(さぶじろ子)
p.9	マルタ(きゅーぶ)
p.10	清姫(まつ)
p.11~14	牛若丸(青ばなな)
p.15~16	マルタ(肉汁uc)
p.17~18	マシュ(肉汁uc)
p.19	メドゥーサ(さぶじろ子)
p.20	ネロ(きゅーぶ)
p.21~31	ジャンヌ・オルタ(ADU)
p.32~34	エリザベート(鮫妻丈二)
p.35~38	酒呑童子(pikel)
p.39	ぐだ子&マシュ(ありす)
p.40~41	アン&メアリー(みにまき)
p.42	ジャガーマン(幾枝風児)
p.43~48	エウリュアレ(久住祐治)
p.49~52	ナイチンゲール(明寝マン)
p.53	あとがき





くっ…しくじったわね…
まさかあんなのがいたなんて…
でもあの子は無事に逃げられた
みたいだし…ひとまず安心ね

ここで一体何をしてるか
分らないけど…
私は絶対負けない…!!

待ってて…「こんなとこ」
すぐに抜け出して
やるんだから…!!



また卵が生まれて……
駄目……イグツ……♡
嫌なのに……か、身体が
勝手に喜んでしゃう……♡

ひぎらっ♡も、もら
頭の中弄らないで……♡

おっぱい

おっぱい

ごめんね……こんな身体じゃ
もう私……カルデアに帰る
なんてできないよ……っ♡

天

ただ死ぬか、
イイヨトして死ぬか。
……そうそう、欲望だ
忠実な子は、好きよ。



はっ

はっ

はっ

ぱんっ

ぱんっ

はっ

ぱんっ

はっ

はっ

はっ

はっ







キミには魔獣どもの
苗床になつて貰おうと
思つてただけだね
気が変わったよ

母さんの下僕に
なつてもらおう

ああ今まで見たいに
抵抗できると
思わない方がいい
キミはこれから
細胞クラスで
塩基契約されるから
自動的に人類の敵の
できあがりさ

それじゃあ…
—さようなら



なっ…
これはっ!?

PRESENTED BY
青ばなな



くっ…
手駒にするための
霊基汚染が上手く
いかぬから肉欲で
随とす手段にか
変えてきたか

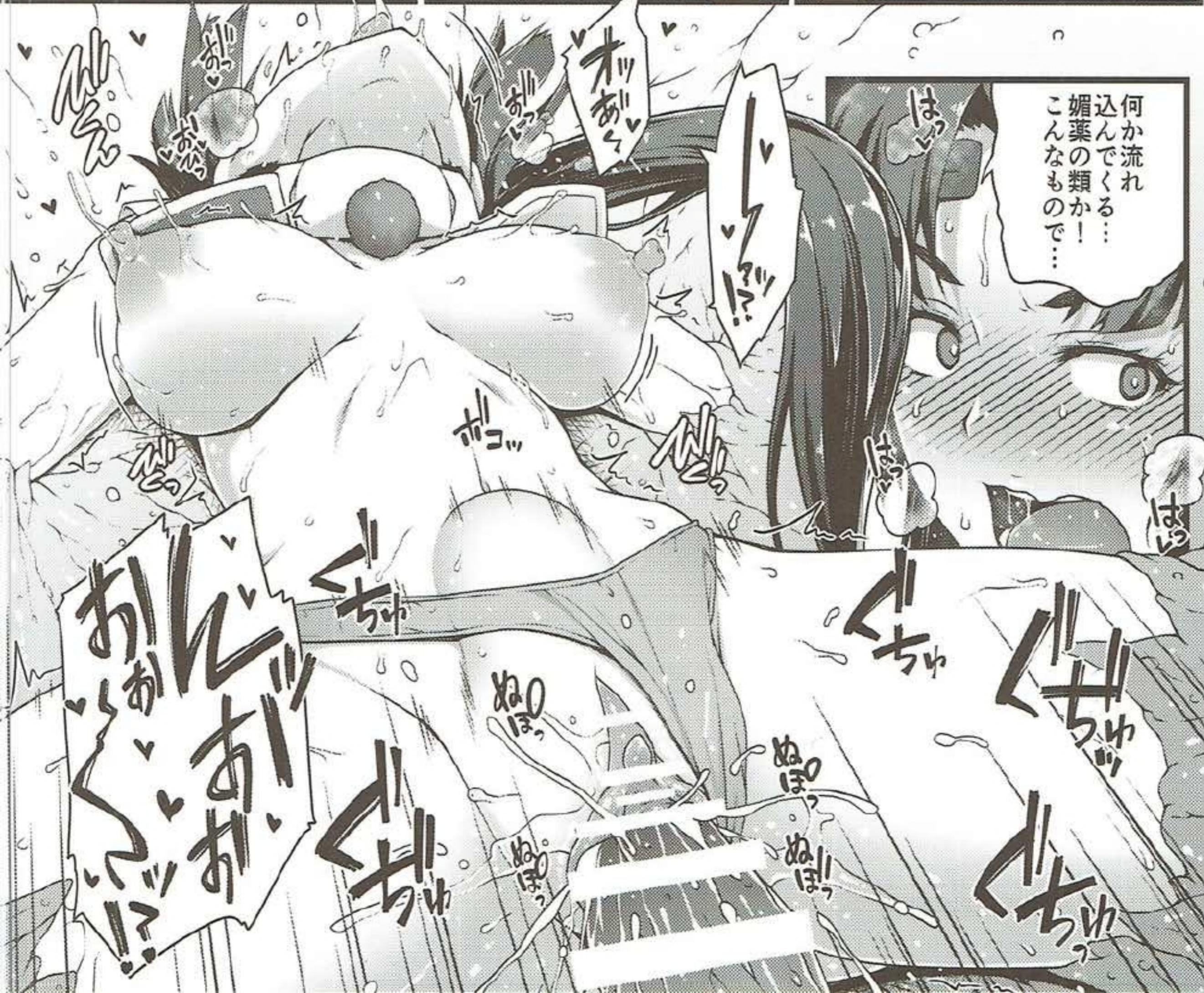
笑止…

この牛若丸が
快楽ごときで
寝返ると思っ



なっ何を!

っう!



何か流れ
込んでくる…
媚薬の類か!
こんなもので…

おんおん
おんおん
おんおん

おんおん
おんおん
おんおん

おんおん
おんおん
おんおん

おんおん
おんおん
おんおん

おんおん
おんおん
おんおん



び...媚薬じゃない...
何か...『泥』の様なモノが
私を内側から...

作り...替えられて
な...なにも抵抗
でき...な...ッ

カッ

ズズズ...

カッパッ

カッパッ

ズズ...

カッ

カッ

カッ

カッパッ

カッパッ

カッパッ

カッ

ドク

カッ

カッ

ドク

ドク

ズズズ...

カッ

カッ

カッ

カッ

ドク

カッ

ドク

ドク

ドク

カッ



ギルガメッシュの
魔術師殿、
どうか……
ご……無事……

お……

かは……

カッ

お……

カッ

あ

カッ



ドロミ

クワッ

ビクッ

クワッ

クワッ

くっ！こんな泥なんかにも負けるもんですか…
 んふう♥あ、熱うい♥焼ける、霊基が溶けるう♥
 はっ!?いけない正気を保たないと
 保たないといけないけどお あっ♥泥に触れた所から
 体が変わっちゃう♥すこい、すこいこれ 気持ちいい♥
 だめだめえ！こんな気持ちいいこと我慢できるわけない♥
 マスターすこいの、この泥すこい♥気持ちいいの♥
 きっとあんた達にも教えてあげるからね、待つでて…
 おっふ♥おっふ♥んほおおおおおおおおお



ギヒヒ♡
ニンゲンどもハ泥テ満たす♡
虫ケラどもハ一匹残らずラフムにシテあげらう♡
ああ♡私ノ泥テ世界ガ満たされてイク
サイコー、サイコー♡
ギャハハハハハハハハハ

ドドド

ぐちゃや
ぐちゃや

ぐちゃや
ぐちゃや

ごめんなさい先輩

泥の浸食に抗うことは ぬらう♥ふ、不可能なようにていじ♥

先輩だけでも逃げてくだサイい

私の体は変わって心も幸福感で満たされつつアリマス

こんなキモチイイことニンゲンが耐えられるハズがありません♥

はあ♥とてもイイ、キモチイイ♥キギ、キギキキヒヒ センぱあい 逃げテ...

ト
ロ
オ



ギヒヒヒ♥センパイ、センパイ

ドロ?どこですか

ラフム ハ トテモ素晴らしいデス♥

センパイにもこの喜びを味わってほしい

その前にニンゲンをミナゴロシにしなさいけませんね

それが使命 ワタシの使命 キヤハハハ キヤハハハハハ♥

ギ
キ
チ

ギ
キ
チ

ギ
キ
チ

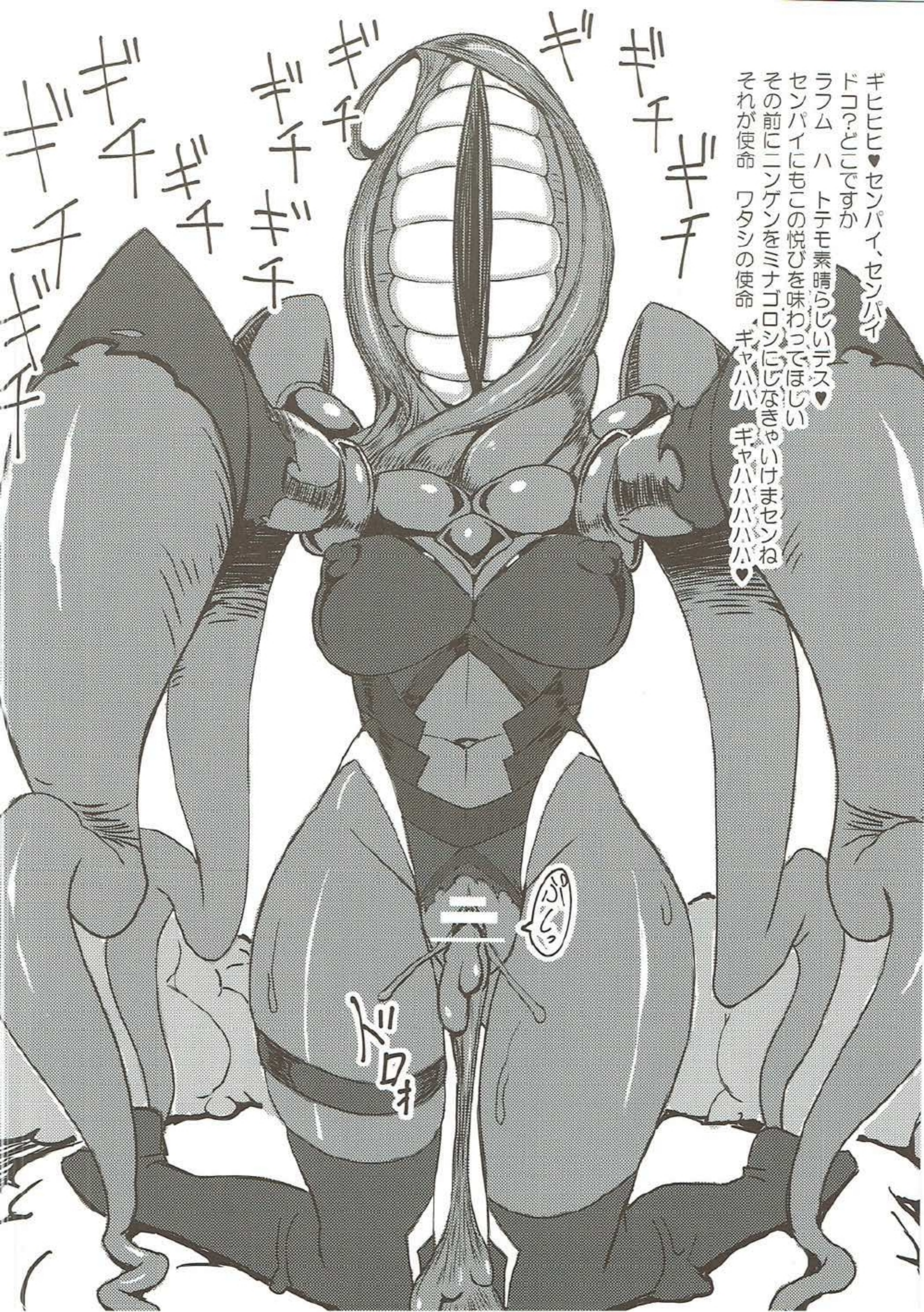
ギ
キ
チ

ギ
キ
チ

ギ
キ
チ

ニ

ムロ







ほんの数日前まで、ウルクと呼ばれていた場所の郊外。今や黒泥に覆われ、かつての栄華は見る影もないその場所で、ジャンヌ・オルタはマシユと対峙していた。

かつて、オルレアンでそうしたときは逆の立場で、だ。

「おはようございます。ジャンヌ・オルタさん」

泥色の肌、深紅の瞳。黒泥で出来た扇情的なインナースーツのみを纏ったマシユが、ジャンヌ・オルタを見下ろす。

ジャンヌ・オルタは黒泥の触手に四肢を拘束され、身動きひとつ取れないでいた。

人類最後のマスター。彼を逃がすため、^{しんが}殿を買って出たのだ。

結果は明白。多くのラフムを焼き尽くしたものの、ジャンヌ・オルタ自信は捕らえられてしまった。黒泥の海に浸されて、靈基の浸食を魔力で押さえはじめてから何時間が経ったのか、それとも何日か経ったのかはわからない。

それでも、マスターがいればなんとかなるでしょ。

絶望的な状況。そうわかっていても、不思議と信じられた。彼には今まで六つの特異点を修正してきた実績がある。それに、

——聖女^{あんな}サマも付いてるしね。

「自分を犠牲にしてまで守ろうとするだなんて……そんなに先輩のことが大切だったんですか？」

嘲るような視線を向けてくるマシユを、睨みの視線で見上げる。

「はン……そんなじゃないわ。アンタたちが悔しがる顔が見たかっただけよ」

答えると、マシユは、

「そうですか」

小馬鹿にしたように嗤い、肩を竦める。

「それよりも、今日はあなたに見せたいものがあったて来たんです」
「見せたい、もの……？」

ロクなものではないだろう。そう思いつつ首をかしげると、マシユは一歩、左へ。隠れていたモノが視界に入る。そこにあった——否、いたのは、黒泥に覆われた塊だった。

「ラフム……？」

疑問形で呟いた直後、オルタはいや、と自らの言葉を否定する。

不気味な黒泥に覆われた体表の質感はラフムのそれと酷似している。しかし、連中のような歪なカタチではない。若干猫背気味ではあるものの、胴体を中心に頭部と二本の腕があり、二本の脚があり、人間の骨格を持っている。顔に相当する位置に、しかし目にあたるものはなく、ラフムと同じ、大きく裂けた口には不気味な笑み。背中からは、イソギンチャクのような触手が無数に伸びている。

「っ……」

そこで、ジャンヌ・オルタは気付く。肩や手元——ほんのわずかに泥の被覆から逃れた場所からは、人の肌が覗いていることに。

それで理解する。目の前の存在が、ラフムとして生まれ落ちたものではなく、ラフムに作り替えられた人間のなれの果てであることに。

「人のことを言えた義理じゃあないけど、随分と悪趣味になったじゃないの。そんなものを私に見せてどうしようっていうの？」

マシユはクスリ、と、嘲笑するように唇を弓にし、

「悪趣味だなんて……折角生まれ変わった姿をお披露目にきたのに、オルタさんは酷いですね」

同意を得ようとするように、彼女が首をかしげる。それに応えるように

「P.Y.I——P.Y.I——Gir——Gir——」

ラフムのそれによく似た不気味な口腔が、言葉とも言えないような音を呟く。

「それじゃあ。負けが決まり切っているのに、まだお母様に刃向かうジャンヌ・オルタさんを……」

そこまで言って、マシユは笑みを深くする。頬を三日月のように吊り上げた、邪悪で妖艶な笑みに。

「犯して、犯して、犯し抜いて……お母様の寵愛の素晴らしさを、身体に理解させてあげてください。この——」

ふふ、と。笑みを零してマシユはソレの股間を撫でる。覆い隠す布もないその部分は、天を突くように上を向いていた。

「——遅しいオチンポで、ね♥」

オルタは男性器の形状をよく見たことがあるわけではないが、知識としては知っている。それは半異形の姿にあって人間のそれとほぼ同じカタチをしているようだった。

浅く反り返った肉棒は、オルタの手首ほどの太さで、その表面には蚯蚓がのたつような極太の血管が這っていた。カリ首の傘は鋭利なほどに抉れ、釣り針のかえしのようなでもある。大御器齧のような黒光りの光沢は、他の部位のそれよりも強い輝きに見えた。

「ふふ……ジャンヌさん。そんなにこのオチンポが気になりますか？」

「そんな、ことっ……」

思わず否定するが、視線は肉棒から離れない。

代わりに、とばかりに、ヒトガタの瞳を持たない顔が、しかしどこでかジャンヌ・オルタの身体を舐めるように見つめ直す。

ゾクリと、背筋を悪寒が駆けた。

ラフムに生殖という概念があるのかはわからない。それでも、目の前の個体が、自分に対して下卑た感情を持っていることは確実なようだった。

「そんなに見たいのなら、もっとよく見えるようにしてあげましょうか」

ヒトガタがジャンヌ・オルタへと近づく。

一歩、足を踏み出すたびに、ニチャ、ニチャと粘ついた足音が生まれる。ヒトガタはジャンヌ・オルタの目の前に辿り着くと、いきり勃った肉棒を見せつける。

泥の臭いに加えて、栗の花蜜を煮詰めたような濃密な臭気が鼻腔を抜け

る。

「間近で見た感想はどうですか？ 御母様の泥で作り替えたおかげで、先輩のおちんちんよりもずっと大きくて……ずっと気持ち良いカタチになっているんですよ♥」

「っ……こんなの、気味が悪いだ……」

け、と言いつ終えるよりも早く。ヒトガタの両手が、ジャンヌ・ダルクの頭を掴み、

「!?」

——挿入する。

身動きのとれないジャンヌ・オルタの口に、いきり勃った肉槍を、だ。

「むぐうっ!?」

突然の行為に、満足な抵抗も出来なかった。手首ほどの太さのある肉棒は強烈な熱を伴って、一息で喉奥までを貫いた。

「むぐっ！ むぐうっ！」

泥に覆われた両手の十指が、ジャンヌ・オルタの頭を掴み、前後に揺すり始める。相手のことなど考えない、身勝手な動き。巨大な質量が口内の空間を埋めては出て行くを繰り返す。肉棒が防衛行動として、唾液を分泌する。肉棒からも我慢汁に相当する液体が染み出し、苦味の強い味と匂いを口内に広げる。

「どうですか？ オチンポの味は？」

じゅぷっ、じゅぷっ、と。ジャンヌ・オルタの意思を無視して、唇から溢れた唾液が卑猥な音を立てる。

極太のマドラーが口内を掻き回し、唾液と我慢汁とを攪拌していく。その動きは次第に速く、そして激しいものへと変わっていく。心なしか、口内を満たす肉棒のサイズが、一回りほど大きくなったようにも感じる。

「え。っ。」

ヒトガタが何かを告げ、先程までにもまして強く、肉棒を喉奥に叩き付けてくる。

「うぐ、えっ……！」

身体が反射としてえずくと同時、肉竿が口の中でピクン、と跳ねた。内側を何かがこみ上げていく。それがなんなのか理解し咄嗟に顔を逸らそうとするも、両手はがっしりと頭をホールドしてきている。口内を埋め尽くす巨根の先端は喉奥に固定されていた。

嫌っ、これっ……！」

拒絶の言葉すら封じられたまま、こみ上げてきたそれが放たれる。

どくどくっ、でゆるるるるるるるっ。

射精る。射精される。

吐き出されたのは精液であり、同時に黒泥そのものでもあった。

唇を、舌を、喉奥を通じて、液体というよりもゼラチンに近いとすら言えるそれが流れ込む音が伝わってくる。

一瞬で、口の中がそれに満たされた。

最初に舌が感じたのは、熱だった。焔刑に処されたそのときよりも尚熱く、しかし蕩けるような強烈な熱感。次に感じたのは味。辛いとも、苦いとも、甘いともつけがたい、不快な汚泥の味が味蕾を通して送り込まれる。そしてその直後に――

「!!??」

快感が、きた。

雷のように鋭く、絶頂感といえる快感だった。

身体が仰け反ろうとする。しかし頭は押さえつけられ、口内には杭のよくな肉棒が居座っている。逃げ道を塞がれて、ただ受け止めることしか出来ない。黒泥も、快感も、だ。

でゆるっ、でゆるるるるるるるるっ。

射精は一瞬で終わらない。それどころか、肉棒は更なる硬さを帯びて、放精を続ける。

「gmaeci! gmaeci!」

「んむうっ!? んっ! むぐうっ!」

行き場を失って、唇の隙間から黒泥が溢れる。それでも足らず、鼻孔を逆流し、鼻汁のように垂れる。それでもなお補い切れず、喉の奥へと流れ込むのを許してしまう。

—— 苦しい……っ……。

息が出来ない。空気を求めて身体が反射的に吸い込もうとして、黒泥が入ってくる。一度侵入を許した喉は、もはや黒泥の流入を止められない。食道を、氣道を、黒泥が満たしてくる。

—— 気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。

—— だけどそれを、気持ちいいと思ってる自分もいる。

身体が熱い。流れ込んでくる泥精の熱が身体に伝播したように、急速に身体が熱を持つ。スカートの下、ショーツのクロッチが潤みを帯びていく。

「んう……んっ……むうっ! んっ……！」

酸素を失って、意識がホワイトアウトしそうになった頃、長い、長い射精が終わった。

「ぐえっ! おえっ……ごほっ、げほっ! げほっ!」

頭を押さえつける力が弱まった隙に頭を引き、肉棒を抜く。口の中に残った黒泥を吐き出すが、栗の花蜜を煮詰めたような生臭い香りと、味蕾に残る苦味は消えない。

「折角射精してもらった先輩の精液だっというのに吐き出しちゃって……勿体ないじゃないですか♥」

頬を擦り付けるほどに近付いてきたマシユが、息を吹きかけるように咳いてくる。鼻孔を抜けるマシユの吐息は、今しがたヒトガタが肉棒から吐き出した泥精と同じ汚臭を帯びていた。

「べっ……」

変わり果てた彼女のスカした顔に、口の中に残った泥精を吐き捨ててやる。

「少しは蕩けているかと思いましたが、まだそんな態度が取れたんですね……♥」

深紅に染まった瞳が、一瞬だけ苛烈な輝きを灯す。魔神柱と対峙したときよりも遙かに強大で、邪悪な威圧感。

「っ……」
息が、止まる。

そんなジャンヌ・オルタの様子に、くすくす、と微笑んでから、マシユは――

「んふっ♡」

頬に散った泥精を指で拭い、舌を伸ばしてそれを舐めとった。くちや、くちや、と。ぷりぷりの泥精を、あえて音を出して咀嚼してから――

「こくっ……んっ……♡」

――嚥下する。

「御馳走様です……♡」

あまりにも妖艶な仕草。同性にもかかわらず――それどころか、彼女はもうちがうものになってしまっているというのに、視線を奪われる。

「子種汁とジャンヌ・オルタさんの涎が混ざった味……とっても美味しかったですよ♡」

でも、とマシユは眉を弓にし、

「お母様に逆らう下等な霊体の分際で、お母様の娘である私に逆らったことは万死に値します」

ゾクリと、怖気が背筋を這い上がる。

ジャンヌ・オルタはそれでも、気丈に笑みを浮かべてみせる。

「はん………だったら殺す？ それとも拷問でもしてみる？ 生憎、拷問なら慣れっこよ」

そう、拷問ならば慣れたものだ。痛みならば耐えられる、苦しみならば堪えられる。この身を生きたまま灼かれたあの苦しみと比べれば、どんな痛苦も余興と嗤える。だけど――

「その手には乗りません」

マシユは、そんな内心を見透かしたように嗤って、

「今度こそ、そのメスに身の程を教えてあげて下さい」

無慈悲な命令を、ヒトガタに下した。

ヒトガタはその不気味な裂け口をニイ、と吊り上げると、身を反らし、股間の屹立を見せつけてくる。見ないようにしていたその股間に、引力が生まれたように視線が吸い込まれる。

「っ……」

――嘘でしょっ!?

あれだけの吐精の直後だというのに、異形の泥茎は先程と変わらぬ偉容を滾らせていた。

「ほら……ココです♡」

マシユの手が、股間へと伸びてくる。スカートの内側へと潜り込み、人差し指がショーツのクロッチを押し込むように撫でる。

くちゅっ。くちゅっ。

股間から、粘ついた蜜の音が響く。泥精に媚薬作用でも含まれていたのか、身体はすっかり発情を示していた。

「ジャンヌ・オルタさんのオマンコ……マン汁がもうこんなに溢れて……♡」

「っ、ん……」

声が漏れる。マシユの指遣いは巧みで、優しく割れ目を刺激されるだけで、官能が走る。

「早く犯してあげてください。もう我慢できないみたいですから……♡」
マシユの指がショーツをズラし、濡れた割れ目を左右に広げる。冷たい空気が秘肉を撫でてくる。

「やっ……このっ……」

抵抗しようとしても、四肢の拘束は強靱で、びくともしない。マシユの言葉に従うように、ヒトガタの肉棒があてがわれる。

「ふぁっ……んっ……」

――熱い。

赤熱した金棒を押し当てられているかのような熱感。しかし伝わってくるのは痛みでも苦しみでもなく、官能。胎の中で子宮が、逞しい犠牲に反応してきゅん、きゅんと疼くのがわかる。

[6 yui 6 tri qkdei]

凶悪にエラの張ったキノコの先端が、指で開かれた割れ目へと埋まっていく。

ぐちゅうつ、と音を立てて、蜜壺から愛蜜が押し出される。

ゆつくりと、しかし確実に、肉棒が膣道を満たしていく。気持ち悪くて気持ち悪くて、それがどうしようもなく気持ちいいのが最悪だった。

「んっ……ふあっ♡ くっ……」

極太の肉槍が根元まで押し込まれて、先端が子宮に触れる。肉棒に宿った熱量が、そのまま子宮に伝わってくる。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「いかがですか……先輩のおチンポは♡」

マシユの視線が、ヒトガタの泥塊を見やる。その言葉と、動作の意味が一瞬理解できず、

「え……？ アンタ、今……なんて……」

「ふふっ……♡」

「まさか……ちよつと……嘘でしょ？ そんなっ……」

頭に浮かんだ想像を否定するため、人肌の露出した左手の甲に視線が向かう。暴力的に乳房を揉みしだいてくる手の甲。そこには流線型の、盾のようにも、あるいは鏃のようにも見える紋様が浮かび上がっていた。間違いない。見間違えるはずもない——令呪だ。それも、あの男の。

「嘘……嘘よっ……そんな、こと……！」

自分でも思いもよらないほどに、動揺を覚える。内容のない問いかけの言葉が喉の奥から零れては溢れる。

「アイツがそんな簡単に……」

負けるはずがない、そう信じる一方で、わかっていてもいる。彼はどれだけ

強靱な意志を持っていて、どれほどの窮状を乗り越えてきたといっても、単なる人間だ。英霊ですら抗うことの出来ない汚泥をその身に浴びれば、どうなるかなんて——考えるまでもない。

それでも、まさか、そんなことがあるわけないと、頭の中で否定を続けるものの、

「クソっ……」

思考を介さず、罵声が漏れた。

「抵抗しても無駄なんですから、早く受け入れちゃった方が楽ですよ♡」

「誰、がっ……アンタたち……なんか、にっ……」

拒絶の言葉を覆そうとするかのように、ヒトガタが動く。腰を引き、肉棒を抜いていき——体重を掛けて、突く。

龟头が子宮を打撃する。

「んひいっ——っ♡」

声。嬌声を越えて、啼き声のような声が出る。

[jybi di: gmaeci gmaeci]

ヒトガタが不気味な啼き声を上げる。

一度そうと言われると、その音がどことなくあの男の声に似ているような気がして——

ヒトガタが腰を引き、突く。

「おほおおおっ——♡」

壊れる。

「やめっ……ちがっ……アンタなんか、アイツじゃ……あっ、ああっ♡」

理性ではもうちがうのだとわかっていても、

「いひいっ——♡」

コレがああ男のモノだと、そう思ってしまうと、

[I:w. i Gtx:wI:w. i eyoyi eyoyi]

意識に反して、腰が動く。

押し潰すような勢いの突き込みに合わせるように、腰が跳ね、肉棒の先

端が子宮の入口を完全に捉える。

っ♡

声にならない叫びが上がる。

ダメなのに、ダメなはずなのに、もうダメだった。

抜かれて、突かれて。抜かれて、突かれて。それに応えて、腰を跳ね上げて。挿抜が繰り返されるそのたびに、理性が削れていく。気持ちいいことに逆らえなくなっていく。

「p...i...yubi」

拘束でストロークを行う肉棒が膨張していくのがわかる。肥大していくそれに膣壁を擦られて、快楽が倍増する。

「あっ♡ ああっ♡ 射精のねっ♡ 私の膣内で♡ 泥精液射精すのねっ♡」

「ああ、ちなみにひとつ、良いことを教えてあげますね。それは先輩じゃありません。最後まで希望を捨てない……なんて言っていたウルクのどなたかですよ……って、もう聞こえてませんか」

マシユが何かを言っているのが聞こえた。声が鼓膜を揺らす。その音の連なりが、何を意味する言葉なのかもわかる。

だけど、よくわからない。わかる必要がない。

そんなことよりも、もっと——もっと、この感覚を味わいたい。

彼の後ろ腰へと脚をまわし、腰をホールドする。

「んっ……♡ してっ♡ キスっ♡ してえっ♡」

その言葉が通じたのか、ヒトガタは口を開き、舌をカメレオンのように長く伸ばしてくる。自らの舌を絡め、泥の唾液を啜る。

「んっ♡ むうっ♡ れろっ♡ じゅるるっ♡」

瞬間、ひととき強く子宮を叩かれ——

「あっ♡ あああっ♡」

射精が、始まった。

どゆるるるるるるるるるるるるっ。

口腔で感じていたよりも何倍も何十倍も何千倍も熱い黒泥のマグマが、膣内にぶちまけられる。

熱くて熱くて熱くて熱くて、凄まじい官能が霊基の全感覚を支配する。泥が身体の中に入ってくる。心の中に、侵入ってくる。

抗うことが出来ない。身体が、心が、それを受け入れてしまっている。もっと——もっと欲しい。

腰に絡めた脚を、きゅっ、と引き寄せる。彼も、更に体重を掛けてくる。吐精を続ける肉棒の先端が、子宮口をこじ開けて、直接子宮に精を注ぎ込んでくる。

灼熱。煽刑に処されたときよりも遙かに熱い濁精の熱が子宮の内側を蕩かせる。直後、

「イクっ♡ イクっ♡ イクイクイクイクうううっ♡」

意識が弾ける。

絶頂は一度ではなく、連続したもの。どくん、どくんと脈を打ちながら注ぎ込まれる精を感じて、ジャンヌ・オルタの身体は仰け反りを繰り返す。

沈む。沈む。沈んでいく。

身体が、心が、黒い、黒い泥に沈んでいく。

頭の上まですべて沈んで、穴という穴から黒泥が

—— 嗚呼、なんて。

—— なんて、

—— 気持ち良いんだろう。

感じたことのないような温もり。だけど何であるのかはすぐにわかった。

—— お母、さん……。

羊水に抱かれる感覚——母の温もり。

ジルの願望から聖杯によって生み出されたジャンヌ・オルタは、母を知らない——否、母を持たない。

本物のジャンヌ・ダルクにはその記憶があるのだろう。何の変哲もない村娘だった頃の、兄妹たちと、両親の記憶が。

だけど、ジャンヌ・オルタにあるのは憤怒と憎悪。呪われた魔女として憎まれ、恨まれ、殴られ、蹴られ、罵られ、犯され、その果てに焼かれた——それだけの記憶。

だからこそ、復讐を礎とした存在として生まれたのだから。ただ今、心にあるのは多福感。誰かの子として、母を想うことのできることへの悦び。

瞬間。脳裏に一人の男の姿が蘇った。

かつて自分に挑み、勝利を掴んだ男。どれだけの苦境であろうと諦めることなく抗い続けた男。こんな自分であっても構わないと、手を伸ばしてくれた男。復讐に灼かれ続ける心を、ほんの少し、ほんの少しだけ癒してくれた男。人理を救うために戦い続けてきた、平凡な——平凡なはずの男。ほんのわずかに残った理性が、言葉を紡ぎ出す。

——悪かったわね……最後まで……付き合って、やれなくて……。

想いの残響はしかし、すべてを抱き受け入れてくれる母性によって押し流されて消えていく。

意識が——落ちた。

黒い、昏い、泥闇の底へ向かって。

「あ……」

口を開ける、雛鳥が親鳥に餌をねだるように、大きく。

大きく開けた口内へと、黒泥が侵入してくる。

口腔から、耳孔から、眼窩から、性器から、肛門から、毛穴から。

黒泥を——受け入れる。

飲んで、呑んで、嚥んで。

母さんの存在をこの身に取り込む。

霊基が書き換えられていくのがわかる。自己という存在が希薄になって、母さんとの境界が曖昧になって、なにかかんがえられなくなっていく。

蕩けて、融けて、溶けて、溶けて。

今度は泥になった身体が、心が、ひとつに固まっていく。

黒泥の海とひとつになった心が、ひとつの身体を形作っていく。それは新しい身体。意識が明瞭になっていき、自我が再構築されていく。

その根底に刻み込まれるのは、母さんへの愛、愛、愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛愛。でもそれは当然のこと。子ならば、母に無償の愛を注ぐのは当たり前前の本能なのだから。

自分のカラダを包む泥が、泥の海から浮かび上がっていくのがわかる。浮かぶのは黒泥の繭だ。その表面に亀裂が入り——割れる。

泥繭の内側を満たしていた泥が散り、その姿が露わとなった。泥の温もりとは違う、空気の冷たさが裸の肌を撫でる。

「んうっ……♡ あっ♡」

ジャンヌ・オルタは艶を帯びた産声を上げた。

「誕生、おめでとうございます。ジャンヌ・オルタさん」

祝福の言葉に、ジャンヌ・オルタは、

「ありがとう。マッシュ姉さん♡」

破顔した。

かつて下等な英霊であった頃が馬鹿らしく思えるほどに清々しい気持ちだった。

弓なりにしなった口の端から、泥色の涎が溢れていく。

「早速ですけど、先輩が逃げた先に行って、先輩を捕まえてきてください——」

「捕まえる、ね……犯しても良いのかしら？」

問いかけに、マッシュは邪悪な笑みを浮かべる。きっと自分も、同じような表情をしているのだろう。

「ええ、もちろん良いですよ。ただ、まだ壊さないでくださいね。清姫さんに静謐さんに頼光さんに……他の皆さんも、先輩で遊びたがっているんですから♡」

聖女の結界に囲まれた一面に、青年は腰を下ろしていた。人類最後のマスター。人々は彼をそう呼んだ。

しかし、彼を助ける英^{サージェント} 霊^{ソウル}たちの姿は今やない。ティアマトとの激しい戦いの末に、一人、また一人と倒れていったのだ。彼を助けるために。

マッシュはラフムに囲まれて「先に行って下さい」と言った。

ジャンヌ・オルタは自分たちが逃げる時間を稼ぐために、^{しんがり} 殿を買って出た。

残されたのはジャンヌと自分だけだ。そのジャンヌも、結界を張ったまま、周囲を偵察してくると出て行って、今はいない。

今まで六つの特異点を越えて、どんな苦境に立たされても、横にはマッシュがいた。他にも多くの英^{サージェント} 霊^{ソウル}たちが支えてくれた。

だけど今、残されたのは自分一人。そう思うと、ただただ不安ばかり募っていく。

「マスター。いるかしら？」

不意に、建物の陰から、声が聞こえた。一瞬ジャンヌのものかと思うも、違う。

「その声……オルタ!? 無事だったんだ……良かった……」

つい先程までの不安が嘘のように晴れた。この逆境もきつと覆すことができる、何の根拠もなくそう思えた。

「ええ……良かった。本当に良かったわ。アンタが無事で……」

悪寒が背筋を走った。

折角再会できたはずなのに、どうして、という疑問に答えるように、「これで私が母さんに御褒美を頂ける。あの聖女は無駄な抵抗続けてるようだけど、生まれ変わったアンタの姿を見れば、簡単に墮ちるでしょ」

「えっ？」

ジャンヌ・オルタが姿を見せる。黒泥をドレスのように身に纏った姿を。

雪のように白かった肌は黒泥に侵されて黒灰に染まり、金色だった瞳は鮮血、あるいは魔神柱を思わせる真紅に。肩と背を大きく露わにした黒泥のドレスは、不気味でありながらも妖しく美しい。胸元は以前よりも二回りも大きくなっているだろうか。泥に覆われながらも、その先端はぷっくりと乳輪ごと膨らみ、淫猥な隆起を見せている。スカートの合間から覗く太ももは肉感的。伝って落ちようとする泥色の蜜を、ジャンヌ・オルタは指先で掬い、舐め取ってみせる。

「ふふ……♡」

真紅の瞳が、かつて、オルレアンで竜の魔女として対峙したときのようにな——それ以上に冷たい瞳で見下ろしてくる。

「あ……ああっ……」

絶望の音が溢れる。

諦めてはいけなさと、そう自分に言い聞かせることすらも

「良い声です。絶望に満ちた無様な啼き声……旧人類最後の生き残り、元マスター♡」

ジャンヌ・オルタの美貌に妖艶な笑みが宿る。嗜虐的で、それでいて情熱的な笑み。その表情を見ているだけで、身体の奥底から獣性が引き出されるような錯覚すら覚える。

実際、股間の男の部分は、硬く膨らみ、戦闘服を内側から押し上げていた。状況を理解していないわけではない。

「好きよ、マスター。大好き。お母さんに逆らい続ける愚かさを差し引いても……」

「え……?」

突然の告白に、間の抜けた声が漏れる。

「貴方は私に温もりというものを教えてくれた。身を焼く憎悪と灼熱以外を知らぬ私の手を取った。だから……」

言って、ジャンヌ・オルタは抱きつくようにこちらを押し倒してくる。

剛力に見合わない華奢な体軀だが、突然の出来事に、踏ん張りが効かない。身体が後ろへと倒れていく。衝撃を吸収してくれたのは、いつの間にか足下を覆い尽くしていた黒泥だった。意外なことに、黒泥は身体を浸食してこない。その代わりとばかりに――

「んっ……♡」
唇が、オルタの唇によって塞がれた。

「っ!？」
唇を重ねるといふよりも、押しつけられるような乱暴で熱い口付け。戦闘服の内側で男の部分が暴発する。

「んふ……♡」
重ねられたままの唇が開き、歯の奥から舌が伸びてくる。歯茎を舌先で愛撫されるような官能が届き、閉ざしていた歯が喘ぎに開く。

発せられた喘ぎ声を呑み込むように、オルタはコクンツと喉を鳴らす。そんな細かな仕草ですらエロティックで、暴発したばかりの肉棒がみるみるうちに体積を取り戻す。舌が入ってくるのを防ぐことができない。

唾液が入ってくる。蜂蜜のような強烈な甘味が思考を蕩かす。抗えない。抗うことさえ放棄しそうになる。

「んっ……むっ……♡」

オルタの舌が口蓋を撫でる。性器そのものを舐められたような衝撃。頭が仰け反りそうになるのを、彼女の腕が抱き留める。胸板に押しつけられた乳房の柔らかさが伝わってくる。

「んむっ……♡ れろっ……♡」
口腔を通じて流れ込んでくる黒泥が、自分という存在を内側から作り替えていくのがわかる。

自分が変わる。書き換えられる。抗わなければいけない。自分は人類最後のマスター。もし自分が敗れば、世界は終わってしまう。だけど――それが気持ちよくて気持ちよくて、肉棒が馬鹿になったように三度目の暴発。下着の内側がドロドロになっているのがわかる。そしてそれ以上に、

自分という存在が身体という殻だけを保ったままドロドロに蕩けていくことも。

周囲に、精の匂いが漂い始める。

重ね合った唇が、ようやく離れる。黒い、黒泥そのものの色をした唾液が名残惜しむように、つう、と糸を引いて、切れた。

「あ……ああ……う……」
言葉が紡げない。言葉を形作る脳の部位が麻痺してしまったように。

「ふふ……♡ 気持ちよすぎて頭がイカレてしまったかしら？ 姉さんにまだ壊すなって言われてるんだけど……♡」

嗜虐的な笑みを浮かべたまま、身体を強く押しつけてくる。柔らかい女性の感触に、男性器が三度もの吐精の直後とは思えないくらい強く屹立する。あるいは、もう身体の変質が始まっているのだろうか。

「貴方さえ堕とせば、貴方を寄る辺としてカルデアにも干渉できる。今度こそ本当に、邪魔者はいなくなる。母さんの理想の世界が出来る……♡」

身体を密着させたまま、ジャンヌ・オルタの手が身体を滑り降りてくる。うなじから肩を経て脇腹。臍を経由して鼠径部をなぞり、硬く膨らみを維持する股間へと。

「あ……あ……」

四度目。ジャンヌ・オルタは小さく失笑しながら、ズボンの内側へと纖手を潜らせた。繰り返しの暴発でドロドロになった下着の内側を、掻き回される。にちゃっ、ねちゃあ、といやらしい粘音が響く。

「あっ……あああ……」
「ふふっ……♡」

空いたもう一方の手が、ズボンのベルトを外し、下着ごと引き下ろす。四度の吐精の濃縮された匂いが拡散しジャンヌ・オルタがすう、と大きく息を吸い込む。

「まだまだ元気ね……♡」



冷たい夜の空気に晒された肉棒が、ピクンと跳ねる。肉棒は再び硬度を取り戻すどころか、萎むことなく体積を保っていた。

「こんなに無駄撃ちしちゃって……」
ジャンヌ・オルタが上体を起こす。馬乗りになられて、豊満な胸の膨らみを下から見上げる。

——犯シタイ。
最初に浮かんだのはそんな感情だった。
両手を伸ばし、オルタの乳房を鷲掴む。

——柔ラカイ。
手指に力を加える。ドレスごと乳房がいやらしく変形し、その反動を感じとして伝えてくる。

ドレスの上から、ぷっくりと膨らんだ乳首を爪でカリカリと引っ掻くと、
「ふあっ……♡ んっ……♡ イイわあ、気持ち、いいっ……♡ でもお……♡ おっぱい、ぱっかりじゃ、なくてえ……♡」

泥で出来たドレスのスカートが、ひとりでに捲り上がる。扇情的な泥色の内腿と、黒泥によって形作られたレース地のショーツが露わとなった。ひとりでにクロッチを開き、ぱっくりと秘裂の部分が開かれたオープンフロントとなる。

「どう、かしら♡ 元マスター？ このオマンコにオチンポ突っ込みた
い？ 滅茶苦茶に犯して、子宮にマーキングしたい？」

「犯ス……犯シタイ……犯シタイイイ……」
「イイわよ♡ 挿入れさせてあげる……♡」

オルタは一度、腰を浮かせると、そのまま硬くいきり勃った肉竿の先端に割れ目を押し当てる。体重が掛けられ、ズブズブと肉棒が淫らな花弁に沈んでいく。

——気持ちイイ。モット、モット——！
オルタの膣内は膣襞の一枚一枚が別個の生物であるかのように、絶妙に肉棒を締め付けてくる。一瞬でも気を抜けば、それだけで達してしまいそ

うな、強烈な官能。

「犯ス……犯スッ！」
獣欲に身を任せ、腰を突き上げる。肉棒の先端が子宮の入口にまで達する。

「ふああっ♡ くうんっ♡」
腰の上のメスが、はしたない、犬の啼き声のような喘ぎを漏らす。

——タノシイ！ タノシイ！
もっと啼かせたい、と思った。だから、突いた。

いつの間にか、身体は黒い、泥のような色に変わっていた。ラフムのような肌だ。だけどそんなことより、踊るように腰を振るメスを犯す方が大切だった。

「あっ♡ はああうんっ♡ そうっ♡ そこおっ♡ もっとおっ♡」

「淫乱メ」
「あっ♡ んああっ♡」

言いながら突き上げると、膣内の締め付けが良くなる。詰られて感じる真性の変態のようだった。

突いて、啼かせて、突いて、啼かせて。
快感が膨らんでいく。そして——


果てる。
淫乱の子宮に肉棒を押し込み、獣精を放つ。

子宮を征服する。精液でマーキングして、自分の所有物だと刻み込む。
「あっ♡ 射精てるっ♡ アンタの精液っ♡ オマンコにっ♡ 子宮にっ、


あつついのおっ♡」
信じられないほどの量の精が出る。みるみるうちに、淫乱の胎が妊婦のように膨らんでいく。

「タノシイ！ タノシイ！」


——3……？ widowqyq"z……？
——j3……s"4 wmeef……



反英霊である自分が、
所謂正義の味方として槍を振るう。
らしくないが、悪くない気分だ。



この絶望的な状況において
次に自分がどうなるか理解していても、
後悔はしていなかった。



終わりの時はあつけなく訪れる。
武器を弾き飛ばされ体勢を崩した際に、
次々に黒いモノに覆いかぶさられ地に伏す。
しかしなお彼女は笑った。




時間は稼いだ。

マスター
後は子リスやいけ好かない金ピカが
何とでもしてくれるだろう。
自分のライヴはここで幕引きだが。

エリちゃん無惨

描いた人：鮫妻丈二



しかしその覚悟は、思わぬ痛みと衝撃でかき消される。
本来ラフムには必要の無い行為。
それは変化前の人間の記憶か、ただの真似事か、
一体の股部から隆起した肉槍が彼女の秘所を貫いたのだ。

他の個体も同様の器官を形成し群がり始め、
数多の異形が彼女を犯し鬨り泥液を吐き出す。
穢れない頃の少女として現界した彼女には
戦闘で負うモノとは異質の、痛み・恐怖・絶望だった。

そんな彼女の心を繋いだのは、
内外を覆っていく暖かい泥と
アタマに響く美しい歌声。

様々な感覚が溶け入り混じった
ドロドロのスープとなり、
彼女の意識は沈み堕ちていった。

幾刻か後、汚泥の羊水から
彼女は再び産まれ落ちた。

その姿は己を陵辱していた
異形の如く歪に変貌していたが

一方で内面は黒く淀みながらも
穏やかに波一つ無かった。



もう自分は罪の意識に苛まれる事もない。
全ては母が赦してくれた
もう自分には歌も偶像(アイドル)も必要ない
全ては母が与えてくれる

彼女は晴れやかな気持ちで翼をはためかせ、
兄弟達と共に飛び立った。

未だ母に弓引く愚かな異物の元へ。

マスター

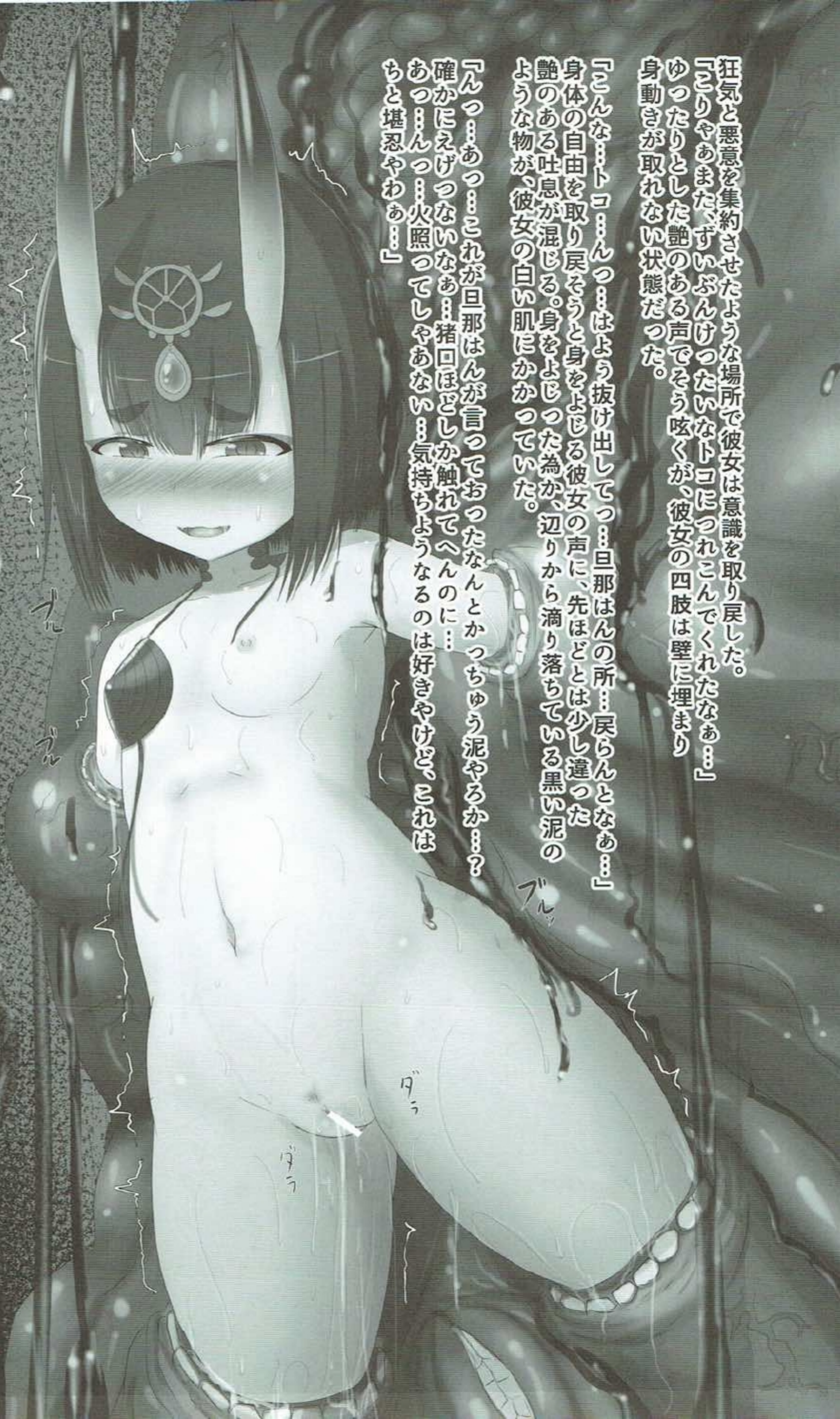


「狂気と悪意を集約させたような場所で彼女は意識を取り戻した。
「こりやあまた、ずいぶんけつたいなトコにつれこんでくれたなあ……」
ゆつたりとした艶のある声でそう呟くが、彼女の四肢は壁に埋まり
身動きが取れない状態だった。」

「こんな……トコ……んっ……はよう抜け出してっ……旦那はんの所……戻らんなあ……」
身体を自由を取り戻そうと身をよじる彼女の声に、先ほどとは少し違った
艶のある吐息が混じる。身をよじつた為か、辺りから滴り落ちている黒い泥の
ような物が、彼女の白い肌にかかっていた。

「んっ……あつ……これが旦那はんが言っておつたなんとかつちゆう泥やるか……？
確かにえげつないなあ……猪口ほどしか触れてへんの……」
あつ……んっ……火照つてしやあない……気持ちよくなるのは好きやけど、これは
ちと堪忍やわあ……」

そう呟く彼女の表情は平静を装ってはいるが、陶器の様な肌にはくつきりと朱が
混じり、小さくも妖艶な身体にはびっしりと汗を浮かべ、もし普段の彼女を知る者が見れば
尋常ではない状態で発情しているのは明らかだった。



暴力的ともいえる性的興奮を鎮めようとして、不意に彼女の身体にそれまで感じたことのないような衝撃が走った。巨大な口にも見える肉塊に頭をくわえられ、それと同時に触手状の肉塊が彼女の秘所を貫いた。

ズマッ

オオオオ

オオオオ

そ、そこお♡うちの子袋やああ♡
噛まんといてえええ♡

なっ…うちの頭ん中っ…♡
んひっ…♡いじらんでく…んひいい♡
おほっ…♡く、狂ってまうっ…♡
いやや…いややああ…♡

あ、い

ほいっ
ほいっ

ん、ん、ん

ん、ん、ん

ぐちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

ぐちゅ

ミヤァァァァ

ホッ

数日後、そこには変わり果てた彼女の姿があった。陶器の様だった身体は至る所が浅黒く変色し、下腹部が妊娠したように膨らみ、漆器のようだった角も、獣の生殖器の様に醜く腫れあがり、精液に似た液体が出続けていた。殆ど意識は残っていないように見えるが、時折彼女の下半身から大量の液体がふき出るたび、痙攣しながら獣の様な野太い声を上げていた。

ダンナハン…ウチ…モドレンウニ
ア…ラヘンワ…カンニン…ナア…

それからまた数日後、そこにはもう彼女の姿は無かった。そこにいたのは醜悪な生物を産みながら恍惚の表情を浮かべる化け物だった。彼女だったツレは蜘蛛の様な姿をしており、その腹部の先端からは、彼女を助けようとしてここにやってきたのか、何者かの足が見えている。

「ボンマニ、アツケナイナア…ウチノ顔見ルナリキイキイ鳴キヨツテ…
フフ…ウチノ腹ツ中デ静カニシトキ…キモチ良ク…骨ノ隋マデ
吸イ尽クシタル…」

「アア…美味イワア…♡身体ガ蕩ケテマイツウヤ…♡
ハアア…♡昂ツテ…マタヤヤ子ガ産マレテマウ…♡」
「ンヒツ…♡アアアア…♡ウチノ子袋押シ分ケテエ…♡
産マレルツ…♡ヤヤ子ヒリ出スツ…♡
ンハアアア…♡アアアアアアアアアアアアアアアツ♡♡」
その空間には彼女だったツレの嬌声と、ツレから産まれた生物の鳴き声だけが響き渡っていた。



さア先輩も私と一緒に
お母様の子供になりましょっや

い、や...やうさ♡
なにこれえ...
おかしくなる...

こんな感じ持っていくの...
先輩のおまんこも
泥サーマンが出るたび
悦んでさるうまそう
締まっていますよ♡

あ...あ...♡
私じゃなくなっ♡
い、いっ♡♡♡♡

♡♡

サマシマ♡

さあさあ♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

♡♡

マッシュクダ子

ありす @nekomikoalice







暗い。視界一杯に泥がひしめくそこは、太陽の光など望むべくもない。空は暗雲に覆われ、僅かに零れた光も泥の覆いによって遮られる。たった一人のために拵えられたその泥の檻には、見目麗しい少女が座り込んでいた。

「……こんなものまで用意して、どういうつもり？」
少女、エウリュアレの視線の先には、無数の異形があった。ラフム、と呼ばれる悪夢のような生命体。

ケイオスタイドと呼ばれる原初の泥から形成された、新たな人類を名乗るそれらによって、エウリュアレは捕らえられていた。

「ギャハハハ！ ブザマ！ ブザマ！ ギャハハハ！」

「ああもう、耳障りな声ね！ 分かる言葉を使いなさいよ！」

気丈に声を荒げる彼女だが、その肉体は弱りきってしまっている。魔力障壁を展開することで檻の中のケイオスタイドに触れないようにしているものの、マスターとのパスはひどく微弱で、障壁を張りながら戦闘を行うことなど不可能に近い。

その上、足の甲辺りまでを埋める泥は時間と共にかさを増しており、数日もしないうちにこの暗い覆いの中一杯に満ちていくだろう。

時間も魔力もなく、あらゆる物を遮断する泥の覆いによって外部との連絡も取れず、その上周囲には無数のラフム。

控えめに言って、万事休すだった。

「……こうなったら」

覚悟を決めたように、ぐっとエウリュアレはなけなしの力を振り絞って姿勢を正す。

彼女とて第三特異点から前線で戦ってきたサーヴァント、敗北がマスターの害にすらなりうると分かっているなら、とるべき手段は一つしかない。「ああもう、普通こういう野蛮なことはむさい英雄達の役目じゃないのかしらっ」

なけなしの魔力をかき集めながらぼやく。もう送られてくる魔力も弱々

しいことこの上ないが、この場を乱す程度ならばまだ何とかなるだろう。最後の最後でこんな無様な姿を自ら見せなければいけないのかと思うと憂鬱になってくるが、それでもあの泥に染められた牛若丸のようなものに成り果てるよりは幾分かましだと自分を納得させる。

あんな醜い、生き物かどうかすら怪しい何かにされるくらいならば、いっそマスターの為に散った方がよほど良い。

そんな考えで魔力を収束させていたのだが、当然それを彼らが黙って見ているはずもなかった。

「ギャハハハハ！ ムダナテイコウ！ コツケイ！ コツケイ！」

周囲で一斉に喚きたてるラフム達。そのうちの何体かが、突然泥を跳ね飛ばしながらエウリュアレと向かってくる。

咄嗟に逃げようと姿勢を変えたエウリュアレだったが、既に彼女の背後には一体のラフムが忍び寄ってきていた。

「っ！？」

「ミニクイ！ ミニクイ！ オマエハミニクイ！」

振り下ろされる黒い足を間一髪で回避する。はらり、と掠った髪が僅かに切り飛ばされるのにも構わず距離をとろうと、後ろへ跳び、

「ツカマエタ！」

「キャッチ！ キャッチ！」

「ギャハハハハハ！」

「このっ！？ 放しなさいっ！」

宙に浮いたエウリュアレの両足を、ラフムの足が宙で押さえつける。

二本の黒い足で左右の足を捕らえた二体のラフムは、そのままエウリュアレを目一杯高く吊り上げていく。長く伸びたツインテールがだらりと垂れ下がり、先端が泥へと浸されるのを見て、

「はな、しなさいっ！ ちょっと、髪が汚れちゃったじゃないの！？」

「ツケル！ ツケル！ ギャハハハ！」

「だから、分かる言葉、でっ、ひっ！？」

虚勢を張った声は途中で悲鳴へと変わる。

あるはずのない感覚が、伝わってきたからだ。

じわり、じわりと。髪の毛の先端から染み入ってくる何かの感触。自身の末端を汚されているという確かな違和感が脳へと上ってきている。

「なに、なによこれ、やめて、放しなさいよ！っ、あ、っ！」

必死に自由になっている手を振り回し、目一杯ラフムの足を打ち据える。しかし、元々戦う力を持たなかったエウリュアレの打撃など、今のラフム達に効くはずもない。

それどころか、振り回された両腕に泥が跳ね、そこから侵食が進んでいく。滲むように泥が皮膚に広がり、その感覚が曖昧になっていく。

「ひっ!？」

思わず口をついて出る悲鳴は、ラフム達をただ嘯わせるだけ。

「ギャハハハ!」「お前」「モオナジ! オマエモ」「同じ!」

その笑い声が。耳障りだったはずの音が、少しずつ理解できていることにエウリュアレは血の気が引く思いだった。

逆さに吊られた状況で、抵抗する余地もなく、ただ相手のされるがままに自分を造りかえられる。

それは、いかにただ愛されるだけのものとして生み出された女神であったとしても、到底堪えられるものではない。まして、その相手が自分の忌み嫌う「醜い」存在ならばなおさら。

だから、彼女は今度こそ覚悟を決めて、かき集めた魔力を一気に膨張させようと、

「ムダ! ムダ!」「もう遅い!」「モウオソイ!」「ぎゃははははは!」

声が響く。笑い声が、耳だけでなく、頭の中に。

それを理解したときには、彼女の中に存在していたはずのたった一つの繋がりが消え去るのが分かった。

パスも、魔力も、すべてが霧散する。霧散し、泥へと溶けていく。

「え、え?」

理解しがたい。理解できない。理解したくない。そんな幾つかの似通った感情が生まれては、またすぐ消えていく。

何が起きたのかすら分からないまま、彼女の理性はゆっくりと溶け出していた。

「泥に触れたお前の負けだ、哀れで醜い古き女神」

「醜い、ですって……! アナタ達にだけは言われたくないわよ!」

「ほら、もう古い言葉を忘れている。笑っている、微笑んでいる! 哀れな女神、醜い女神!」

「え、あ、ちが、忘れてなんかいない! ちゃんと、喋って、あ、え……?」

逆さ吊りのまま、口をパクパクと開いたり、閉じたり。まるで喋り方を忘れてしまったように。

ラフムと会話が出来る。その事実には驚愕し、それを満足に飲み込む暇もなく、次の変化は訪れた。

ずるり、と。エウリュアレの髪を泥が這い登ってくる。あの汚される感覚を伴って、真っ直ぐに。

泥は瞬く間にエウリュアレの髪を美しい紫から濁った白へと塗り替え、そしてその向こう側にある皮膚へと浸透していく。まるでそれ自体が意志を持っていくかのように。

「あ、嫌、入ってこないで、消さないで!」

泥が頭皮へと浸透し始めた直後、エウリュアレは自分の中身が次々に欠落していく感覚に襲われる。

それは、愛する姉妹との絆。

それは、優しい怪物との絆。

名前も姿も思い出せる。けれど、顔だけがぼんやりと揺らいで、それから次第に分からなくなっていく。

「嫌、嫌、駄目よ、消えないで、だめ……!」

気丈で、蠱惑的で、それでいて愛らしい女神。愛され、守られるだけの

存在が、涙を流して誰にも知れず懇願する。

痛みもなく記憶を消し去られるその感覚は、女神として生まれた彼女であつても触れた事のないもので。それ故に、動揺も大きかつた。

彼女らしからぬ気弱な声が、思わず漏れてしまうほどに。

「醜い、醜い！ 母の愛を拒絶する醜い生き物！」

「ギャハハハハ！」

「ギャハハハハハ！」

理解できてしまう声が、耳障りな哄笑を木霊させる。

すっかり変わり果ててしまった髪を振り乱しながら、涙を溢すエウリュアレを眺めて、けれどその足を放すことはない。

既に魔力障壁は存在せず、放せばその身が泥に浸されるのは分かりきつたことだと言うのに、彼らはそれをしなかつた。そうしない方が無様な姿を見られると、彼らは知っているから。

顔がすっかり思い出せなくなつて、ただその姿だけが僅かに思い出せるだけになつて。

大切な姉妹の姿が、弟のように思う怪物の姿が、水滴を垂らしたように滲んでいて。

「私、メドゥーサ……！ アステリオス……！」

縋るように、あるいはこれ以上消えてしまわないように名を呟く。

彼女が見せるはずのない気弱な姿で。勇者の悲劇を嘲り笑つたその顔を悲嘆に歪めて。

けれど、濁つた白い髪の上から更に上り始める泥はそれすらも愛へと沈めていく。

「いや、あ、おつ、ん——！？」

泥が涙ごと彼女の顔を覆い尽くす。逆さに吊られ首までを泥で覆われた彼女は、それを引き剥がそうと掻き巻くものの、その度に指先が泥に染まり、やがて自分の意思に反して指先の動きがぴたりと止まってしまふ。

頭を泥に覆いつくされたエウリュアレは、緩やかに消え去っていく記憶

を必死に留めようとして、

——どうして、覚えていなくちゃいけないんだっただかしら。

はて、と思考に疑問が浮かぶ。

確かに何かを引き留めようとしていたのだ。大切だつたはずの何か、愛していたはずの何かがあつた。

あつた、はずだ。なのに、それを確信できない。

引き留めようとした理由が思い出せない。引き留める必要性を感じられない。

自分には大切なものがあつたのだ、という漠然とした思考は存在しても、それが何だつたのかというところにまで及ばない。

他者によって消し去られたということすら忘却してしまつたエウリュアレは、流れ込んでくる感情の奔流を当たり前前のもつとして受け止めてしまふ。

——ああ、何で忘れていたのかしら？ こんなに素敵で、何より大事なことを。

叩きつけられた感情が、愛という暴力が彼女の思考を捻じ曲げる。

あるはずのない記憶を作り出し、得たはずのない想いを生み出して。

エウリュアレの、漂白されていく心の中に、彼女の存在を根付かせていく。

ほやけていた愛する姉妹は、何より愛する母の姿に。

消えかけていた優しい怪物は、黒く愛しい兄弟の姿に。

そして、それを契機として、彼女が僅かにでも動かしていた両腕から力が抜ける。

最早そこにあるのは、顔と髪を泥で覆われ吊り下げられた、か弱い少女に過ぎなかつた。



「あ、はっ」

いつの間にか泥の消えた顔は黒く染め上げられ、吐息からは甘い香りが漂う。女神、と言うにはあまりにおぞましいその顔に浮かぶのは、やっとなるべき姿になれたと言う安堵と、快楽。

黒い大地に横たわった彼女は、顔と腕だけが黒く染まった状態で目を開き、

「おはよう、皆♥」

「おはよう、エウリュアレ。気分はどうだ？」

「とてもいいわ……♥ 本当に、とつても♥」

赤い瞳を瞬かせて、エウリュアレがその体を起こす。

顔や腕は黒く染まり、髪色も白濁していたが、足や体は元の肌色であることに気づいたエウリュアレは忌々しげにその相貌を歪め、

「ああ、アア！ なんてコトナ、こんな醜い体がそのままなんて！

お兄様、これは、私が才母様に逆らッた罰なのかしら……」

当たり前のようにラフムと言葉を交わしながら、エウリュアレは黒に染まっただけの自分の体を撫で付けて悲嘆に暮れる。

今の彼女にとって美醜の価値観は母と関わりがあるかどうかという一点。

母の愛で変質させられた自分の肉体が元のままであることは、彼女がまだ母から認められていないという考えを生み出してしまっていた。

その彼女に、ラフムはその足で軽くエウリュアレの頭を撫でると、

「そんなわけないだろう。母は全てを愛してくださる。その体はお前が自分から愛を受け取れるようにとわざわざ残してくださったのだろう」

「ホントウに？ ああ良かったワ！ こんなニ気味の悪い体のママだなん

テ耐えられないモノ！」

満面の笑みで、エウリュアレが笑う。

それはあまりにあどけなく、純粹無垢で、それ故に普通の視点をもってすると筆舌に尽くしがたいおぞましさに満ちていた。

エウリュアレはラフムの足を借りて立ち上がると、近くにある泥溜まりへと近づいていく。

一糸纏わぬ姿のまま、彼女は泥溜まりへ素足を浸ける。その瞬間、電撃が背を駆け抜けたようにびくりと身を仰け反らせた。

「んん……っ♥ あア、なんテ心地良イ……♥ お母様ノ愛が、ンひいっ

ぐるりと瞳を上に向け、黒い涎を口の端から垂らしながら、エウリュアレはびりびりと全身を駆け巡る快楽を堪能する。

浸した足は瞬く間に黒く染まりあがり、けれど髪を侵した時とは違い、それ以上に這い上がってくることはない。エウリュアレ自身が泥を受け入れ、自ら浸っているのならそんなことをする必要もないのだ。

黒く染まった足を動かす度にバチバチと脳内で快楽と多幸福感が弾け、泥に染まった腕がびくびくと痙攣する。

「エウリュアレ」

「ふふっ……、なにかしら、お兄様♥」

足先だけでなく、ゆっくりと全身を泥に浸して快楽を享受しながら、エウリュアレがラフムへと視線を向ける。

愛しい兄弟を見るその瞳は情欲に濡れ、泥に塗れた艶かしい姿と相まってまるで娼婦のような雰囲気漂わせていた。

「母の愛を、お前の姉妹にも分けてやれ。たっぷり」

「アア、それハとつても……楽しソウネ……♥」

泥を体に摺りこみ、泥で喉を潤しながら、エウリュアレはラフムの言葉ににたりと笑う。

「私、メドゥーサ……あア、小さいメドゥーサト大きいメドゥーサもイ

たワね♥ 皆、あの醜イ姿かう開放してアげないト……♥」

エウリュアレは狂った美醜觀のままですう眩く。

色欲と愛に溺れた赤い瞳を爛々と輝かせながら、彼女は泥を浴びながら姉妹達の末路を想って身を震わせる。

子を孕むことも出来なかったはずの下腹部が疼き、全身を犯す泥から伝播する快樂が脳を焼いていく。

最早、彼女に姉妹の情など存在しない。

あるのは、かつて姉妹という存在だった相手を解放するという歪んだ使命感。

母の愛に沈み、母の思うがままに変えられることが最も美しい。それが彼女を動かす行動原理。

故に、彼女はラフムを愛し、泥を愛し、母を愛するのだ。かつて、自身を愛した勇者達と同じように。

やがて姉妹たちが母の愛に溺れる様を想像し、エウリュアレは抑えきれない笑みを浮かべていた。

っ…

ラフムと呼ばれた生物に
敗北した私たちはバラバラに
分断され…私はこうして
ここに捕らえられている

グレ

ハ

6tr-6tr-

…無駄です
諭え慰み者として私を汚そうと
その全てを滅菌し貴方達を
治療しましょう。

アレには生殖機能はない…
恐らく興味目的での性行を
望んでいるのでしよう





勝てない♡♡♡

オオオ

オオオ

オオ

オオ

オオ

オオ



オオ

ちが：なんで私は
こんなものを
清潔に感じ：



オオ

私の認識が
書き換えられてい〜



こ、こんな不潔な…
ふけ、つ…？
あ…え…？

オオ

オオ



ああ……次はここに母上の
意向に従わぬ不届き者が
いるのですね

c4q@--6tp--

この喜びを知り得ない
下等生物など
病気に侵されているに
違いありません

ではその病原菌まみれの
霊基の治療を開始しましょう



牛若丸に酷いことする
奴なんてゆるさん

青ばなな



ありがとうございました！
こういうエロあんま
かかないので新鮮でした！！

さぶじろ子



FGOは毎度本当に
素晴らしい題材を
くれますよね

ADU



ケイオスタイドやラフム系は
一度描いてみたかったので、
とってもタノシイ合同でした！

肉汁uc



素敵な合同本に参加できて
嬉しいです。
ケイオスタイドはいろんな
シチュが楽しめて
美味しいですね・・・！

ありす



悪堕ちモノはとても好きな
ジャンルなのですが、
普段なかなか描く機会が
なかったので描いてて
とても楽しかったです！
参加させて頂きありがとう
ございました！

pikel



ジャーマンには
幸せになってほしい

幾枝 風児



普段あまり描きませんが…
苗床とか悪堕ちとか…
いいよね…

ふとし



七章クリア後からずっと
夢みてた合同誌がまさか
本当に拜める日がくるとは、
終章で浄化されずに
踏み止まった甲斐が
ありました。

小川 小



ありがとうございました
喜んでいただけただけなら
幸いです、つかれた。

まつ



ネロ・オルタはもうちょい
描きたいな。
ツイッターも見てね！

きゅーぶ



ケイオスタイドくんの
おかげで7章は急に
エロゲになりましたね…

みにまき



ケイオスタイドは
それだけでエロいので、
エロを省いても
問題ないんじゃないかと、
いやでもエロい方がいいか

久住 祐治



ケイオスタイド…悪堕ち…
ということでもっとも
楽しく描かせて頂きました！
お誘いありがとう
ございました！

る～く



悪堕ち・異形化・常識改変
・パンデミック…
ケイオスタイドって
素晴らしい！！

鮫妻 丈二

あ と が き

あとがき

2016年12月某日、我々は衝撃を受けた。FGO7章の配信である
その爪痕は大きく、長く忘れられていた

"Fateは元々エロゲー"

という事実を思い出すことになったのだ...

というわけで今回、ケイオスタイド合同を主催させていただきました
明寝マンと申します
冬ユミ原稿真っ最中に配信されたFGO7章は実際とても濃密でした
それはもうあと1か月早ければ冬の本の内容変わってたんじゃないかな？という位
その中でもとても気に入ったのが
"ケイオスタイド"

でした
悪堕ちを始めとした様々なシチュエーションを体現できるこれは
最終章を迎えて心が綺麗になりかけながらも
ケイオスタイドを使ってエロ絵描きたい...という欲求を抑えられませんでした

そんな皆で集まってケイオスタイド合同が出来上がりました
豪華な面子に恐縮しております

自分も非常に楽しく描かせていただきました
(でも婦長は表情を崩すのがなかなか難しい。是非もないよね！)

では、この本を手にとらせてくださった皆様
そして執筆してくださった皆様

3lt@s4b@x@ejdq !

発行：2017年4月30日
(COMIC1☆11)

印刷：STARBOOKS 様

連絡先
senpai_763@yahoo.co.jp

本誌の無断アップロード・無断転載
18歳未満の方の
閲覧・購読・所持を禁止します

作家一覧(敬称略)

青ばなな
ADU
ありす
幾枝風児
小川小
きゅーぶ
久住祐治
鮫妻丈二

さぶじろこ
肉汁uc
pikel
ふとし
まつ
みにまき
る〜く
明寝マン